



正玄(まささはる)の言葉
自分は元より、学浅く聖賢の業及びびがたいが、君を正し、士を撫(ぶ)し、民をあれむの三つを基本とし、公正いささかも私心なければ非義のそしりは受けない」



小田山にある6代田中正玄墓

玄宰の若い時
分らないことがあると納得するまで、自分で調べ、実践する性格だったとい

二十九歳の時、一ノ瀬要人(かなめ)、町人ら約十五人で、物頭の家で酒宴をし、御叱り」を受けたほど、下からの人望が厚かった。

田中正玄(はるなか)

『君松市史』『会津藩教育考』によると、

田中家の祖玄義(はるよし)は、伊勢国の出で武田信玄の子勝頼が当初高遠城主だったことから勝頼に仕えて、長篠の戦いで戦死します。その後、高遠城主となった保科正之に見いだされ一字を貰い正玄(まささはる)と名乗り、筆頭家老として四千石を貰います。

六代目となる玄宰は、寛延元年(一七四八)に生まれ、十三歳で千石の家督を継ぎ、天明元年(一七八一)三十三歳で家老となります。

そのころの会津藩は、約六〇年前に八代将軍徳川吉宗が享保の改革を実施し、会津藩も取り組んでいたものの財政は改善せず、五七万両(約三四〇億円)の借金を大坂や江戸の商人にしていました。

さらに、天明二年(一七八二)から七年まで、六年間続いた天候不順と浅間山の大噴火による大飢饉が重なり、さらに悲惨な状況となったのです。天明四年(一七八四)には、病気を理由に家老職を辞めます。

しかし、同年十二月、藩祖保科正之がまとめた『五条の家訓かきん』と『一程治教録(にていちきよろく)』(中国北宋の学者明道と伊川兄弟の著述を集めた『一程全書』から、政治や教育に役立つ名言を抄録したもの)を参考に次の八項目を建議しました。

- ① 軍備の充実
- ② 学術教育を振興
- ③ 財政の立て直し
- ④ 刑罰法を定める
- ⑤ 人材の登用
- ⑥ 賞罰の明確化
- ⑦ 上下身分の徹底
- ⑧ 民政の秩序改革

家老の北原と三宅は賛成し、高橋は反対しました。が、五代藩主容頌(かたのぶ)の命により決済されます。そして、翌、天明五年(一七八五)家老職に復帰し、改革を進めました。

- ① 軍備の兵法を、可陽流から長沼流へ変更。
- ② 玄宰が江戸にいたとき、熊本藩の古谷重次郎から教えられた教育を改革し、「日新館」を創設。
- ③ 四人の家老職は、月番制から、担当制とする。

○ 軍備は北原采女(うねめ)
○ 民政と財政を玄宰
○ 公事(裁判)を三宅孫兵衛
がする担当制へ変更し、享和三年(一八〇三)に大老となり、さらに

- 幕命による「風土記編纂」の開始
- 会所前への目安箱の設置
- 間引きを禁止し、里子制度により人口増加
- 連帯性として五人組制度の強化
- 下級藩士への開墾の奨励
- 越後からの開墾農民の受入れ

産業振興として
○ 漆木を植栽し、漆の確保と蝨燭の増産
○ 京から蒔絵職人を呼び、指導
○ 灘から杜氏と麹職人を呼び「清美川」を製造し販売
○ 会津本郷焼の改良のため鍋島藩への潜入
○ 朝鮮人参の増産

とくに藩校「日新館」は、享和三年(一八〇三)に完成し、水戸の弘道館、萩の明倫館とともに三大藩校の一つとなり、全国トップクラスで、その後の人材育成に大きく貢献しました。

改革は軌道に乗りますが、文化三年(一八〇五)には、藩主容頌が死去し、六代容住(かたおき)も五カ月で病死します。

玄宰は文化五年(一八〇八)六十一歳で没します。鶴ヶ城と日新館の見えるところに埋めてほしい」との遺言により、小田山山頂に墓が建てられました。その後、会津藩主は、三歳で七代となった容衆(かたひろ)が二〇歳で子も無く死去し、八代目となったのが水戸家二男の子を貰い七代の弟として嘘の届けをしていいた八代目容敬(かたか)がなり三一年間治世をしました。